

夏目漱石「琴のそら音」試論

柳 政勲

1. はじめに

「琴のそら音」は、1905年『七人』に発表され、後に『漾虚集』（1906年刊）に収められた夏目漱石の短編小説である。『漾虚集』には「琴のそら音」以外にも、「倫敦塔」、「趣味の遺伝」など、主に漱石初期の浪漫的な傾向を現す作品が多数収録されていて、先行研究においては所謂「漱石の低音部」¹を説明する材料として長く扱われてきた。そして、「琴のそら音」は漱石の低音部の中でも非常に低い位置に存在するとされ、副次的に言及されることが多かった。が、2000年以降からは一つの作品論として「琴のそら音」を分析する論考が増える傾向にある。

例えば、主人公の「余」が持つ婚約者に対する期待と不安を中心に分析し、彼女は本当に「余」を愛しているのかという愛の強要観念の隠蔽として読む論²、死を文学的なロマンティズムとして認識する動因が科学の持つ合理性にあるという逆説を通して、科学と文学の背中合わせのような結合をみる論³、「幽霊という狂気」に囚われながらも正常へと帰着するという論⁴などがある。外にもインフルエンザという要素を中心に「琴のそら音」を文学史の中に位置づけようとする論⁵や、「余」と「津田」の関係に注目し、二人の友情が深まる過程として捉える論⁶などが見られる。

本稿では、本作品における怪奇現象や迷信と、それに対する近代的知識人の反発の表象のありかたの裏に、急速な近代化・西洋化への途を歩みつつあった、日露戦争前後の時代の不安や病理を観察していくことになる。その目的のため、本作品における「迷信」と「近代的知」との関係に焦点をあてる。この作品において、「迷信」と「近代的知」とは、どの程度どのように対立しているとされているのか、あるいは意想外の共通性をもつものとされているのか。

主人公「余」が家事のために雇用している年配女性⁷は、犬の遠吠えや占い、幽霊などを信じる、「迷信」や近代化以前の世界把握の方法を代表する存在として、ひとまずは設定されている。他方、近代化・西洋化された帝国大学における国家的教育システムの所産である「余」や「津田君」は、近代的知のありかたを代表するべき存在であるはずである。しかしながら、これが本稿の主要な主張点であるが、本作品においては、迷信と近代的知のありかた、旧来の武士階級出身の年配女性と、

「余」や「津田君」の世界観とは、明確で単純な相互排他的二項対立の関係にあるものとはされていない。

心理学を研究する道を選択した文学士の「津田君」は、死霊などの「迷信」を頭から否定するのではなく、ときに西洋の知的権威（余が訪問した時に読んでいる幽霊関係の本とかプロアームの話など）を参照しながら、それらが近代的・西洋的知の体系によって「合理的」に説明可能なものとなる可能性を思索している。他方、「津田君」とは違い、大学卒業後官僚としての「現実的」な立身出世の道を選択した「余」は、「津田君」の浮世離れした生き方と知識のありかたを部分的には軽侮しつつも、「迷信」とされてきた現象に、新たな近代的・西洋的再解釈を与えつつあるかに見える「津田君」に対する劣等感と畏怖を禁じ得ないでいる⁸。

この作品では、旧来的なものであると想像された死霊の訪れなどの「迷信」と、近代的・西洋的知のありかたの葛藤や矛盾が生じているのであるが、本作品が、日本がヨーロッパ世界と闘った最初の戦争である日露戦争の最中という時代背景のなかに置かれていることが注目されねばならない。「津田君」が語るのは、日露戦争出陣中の軍人を、死んだ妻の霊が訪れたという逸話である。当時、戦争はグローバルな広がりをもって展開されるようになりつつあった。それと並行するかのようになり、異なる文明圏や生活圏が相互に接触しあうことにより、病もまたグローバル化しつつあった。「余」の婚約者、「露子」はインフルエンザのために体調を崩している。本作品は、西洋的・近代的知の技術、戦争における殺戮の技術、疫病とが、おたがいに関連をもちつつグローバル化しつつあった時代という背景のなかに配置して考察される必然がある。「津田君」宅から帰る途中、怪奇現象じみた出来事に遭遇して、婚約者の健康に対する迷信めいた不安を増大させる「余」であるが、実際には婚約者がすでに健康を回復しつつある場面で、本作品は終結する。一見したところ、怪奇現象などの迷信がもたらす恐怖や不安は、このエンディングのために、最終的には治癒され、抑えこまれて、「余」は現実的、合理的で近代的な世界観の妥当性を再獲得するかに、見える。しかしながら、この作品において、近代的・現実的・啓蒙的な知のありかたが、前近代的・迷信的・蒙昧な誤謬を、最終的に制圧するのだと、どの程度いえるのであろうか。「余」の婚約者の名前は、「露子」である。この名前は必然的に円朝の『牡丹灯籠』の女幽霊を想起させる。以上の点の分析を踏まえて本稿は、本作品における怪奇現象や迷信表象の背後に、急速な近代化・西洋化への途を歩みつつあった、日露戦争前後の時代の不安や病理を観察していくことになる。

2. 「琴のそら音」の人物設定

一人称小説「琴のそら音」の前半において、その中心になる人物は、「余」ではなく、「津田君」である。物語は、久しぶりに友人津田君の下宿を訪問した「余」が「津田君」に相談するという構成になっているが、「余」はただ「津田君」の話聞いて、その論理に振り回される受動的な存在にすぎない。「余」は自分自身について「刻下の事件を有の盡に見て常識で捌いて行くより外に思量を廻らすのは能はざるよりも寧ろ好まざる⁹⁾」人であると語っている。所謂常識人であると言いたいのだろう。しかし、「余」は常識人であるからこそ、この物語において存在感がない。無味乾燥な常識人としての「余」より、寧ろ物語を展開して行くのは、「余」に怖い話を聞かせてくれる「津田君」である。しかし、実際ものを語っているのは、「余」なので、読者は「余の内面」を目撃することしかできない。つまり、物語を導いていくのは「津田君の話」で、その話を聞いた「余の内面」を通して読者はこの物語のテーマに感応するといえるだろう。

「余の内面」において、「津田君」はアンビバレンスな存在である。一緒に大学時代の思い出を語り合う友人でありながらも、現在「余」と「津田君」が共有できるものはほとんどない。却って二人は対立するかのようにもみえる。生活が大変だと苦情を訴える「余」に対して「津田君」は同情しながら言う。

「成程少し瘠せたようだが、余程苦しいのだらう」と云ふ。気のせいか当人は学士になつてから少々肥つたように見えるのが癪に障る。机の上に何だか面白そうな本を広げて右の頁の上に鉛筆で註が入れてある。こんな閑があるかと思ふと羨しくもあり、忌々しくもあり、同時に吾身が恨しくなる。

「君は不相変勉強で結構だ、その読みかけてある本は何かね。ノート杯を入れて大分叮嚀に調べて居るぢやないか」

「是か、なに是は幽霊の本さ」と津田君は頗る平気な顔をして居る。此忙しい世の中に、流行りもせぬ幽霊の書物を済まして愛読する杯といふのは、呑気を通り越して贅沢の沙汰だと思ふ¹⁰⁾。

何より、「余」は忙しい。久しく津田君の家に来なかったのも忙しかったのが理由である。そして、この後津田君が幽霊の話をする時も「忙しい余に取つてはこんな機会は又とあるまい」と、自分が忙しい存在であることを強調する。「余」だけではない。この世自体が忙しいのである。にもかかわらず、のんびり「流行りもせぬ」幽霊の書物を読んでいる津田君を「余」はいささか見下している。

「津田君」に対する「余」の軽視の姿勢は繰り返して登場する相馬焼の茶碗によっても示されている。「津田君」が出したこの茶碗を「余」は3回眺めるのだが、それはどれも津田君の話聞いて考え込む時である。最初は「珍しいね、久しく来なかつたじゃないか」という挨拶に答える前で、後は迷信を信じる婆さんの話をする時とインフルエンザによって死んだ女の話聞いた時である。「余」は茶碗を眺めることで、自分の答えを探すのであるが、婆さんの話をする時にはいきなりそれまでの話題と無関係な話題を持ちだしてくる。お茶を飲んでしまってから婆さんの話をしようと促す津田君だが、「余」は婆さんとは無関係なことを思い出す。

相馬焼の茶碗は安くて俗な者である。もとは貧乏士族が内職に焼いたときえ伝聞している。津田君が三十匁の出殻を浪々この安茶碗についでくれた時余は何となく厭な心持がして飲む気がしなくなつた¹¹。

「俗な者」としての茶碗を思い出したのは、直前に婆さんの話をしたのが理由だが、続いてくる「貧乏士族」と重なることで「俗な者」は「津田君」とも結びつけられる。大学を卒業して働き、今は自分の家を持つようになった「余」はこの後結婚を約束した細君もいる。下宿住まいの「津田君」は、祿に働きもしない癖に「余」を同情したり、「余」が軽蔑する婆さんの言動に賛同したりする。実社会でエリートの道を歩む「余」にとっては「俗な者」と思われるだろう。もちろん「津田君」に言わせれば、高等教育を受けた結果、今はまだ下級とはいえ、将来の世俗的な出世を見込むことのできる官僚の地位を得て、その出世の必要条件でもある、「良家」の娘との結婚を目前としている「余」こそが、ブルジョワで俗な存在かもしれない。だから、「津田君」は「余」を同情し、「余」はその同情を嫌うのであろう。

「余」の内面において「津田君」は自分が想定している「高級」の枠からは外れた存在であるといえる。が、同時に「余」の過去の記憶において、「津田君」は「余」より優秀な存在でもあった。

津田君と余は大学へ入ってから科は違ふたが、高等学校では同じ組にいた事もある。その時余は大概四十何人の席末を汚すのが例であつたのに、先生は_然として常に二三番を下らなかつたところを以て見ると、頭脳は余よりも三十五六枚方明晰に相違ない。その津田君が躍起になる迄弁護するのだから満更の出鱈目ではあるまい。余は法学士である、刻下の事件を有の儘に見て常識で捌いて行くよりほかに思慮を廻らすのは能わざるよりもむしろ好まざるところである。幽霊だ、祟だ、因縁だ杯と雲を攫むような事を考へるのは一番嫌である。

が津田君の頭脳には少々恐れ入っている。その恐れ入つて先生が真面目に幽霊談をするとすると、余もこの問題に対する態度を義理にも改めたくなる¹²。

法学士の「余」と違って「津田君」は文学士として心理学を研究しているが、二人は高等学校からの同期生である。「津田君」に対する「余」の記憶は、頭脳が明晰で自分より成績が優秀だったことだが、「雲を攫む」「先生」「恐れ入る」など、滑稽に描写している点も見られる¹³。その「先生」が怪異現象は科学的に証明できるものだというので、「余」も態度を改めるしかない。

「津田君」が真面目に語る幽霊談とは、日露戦争で満州滞在中の夫に逢いにいく妻の幽霊の話である。有り得ないことだと最初は「津田君」を罵倒する「余」であるが、「津田君」が持つ「知」の権威に少しずつ屈服するかのようにも見える。「津田君」の話聞いて「法学士に似合はしからざる感じが起つた」「余」は、結局「津田君」の話認めることになる。「有の儘に見て常識で捌いて行く」常識人としての「余」が態度を完全に変えた理由は、「津田君」の話聞いてみようと思った瞬間と同じく「津田君」の持つ「知」の権威にあった。「法学士の知らぬ間に心理学者の方では幽霊を再興して居る」と思いながら、「余」は自分の無知を告白し始める。「知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬ」と無知を認め、完全に「津田君」の論理に従うようになった「余」に対して、「津田君」は「ロード・ブローアムの見た幽霊杯は今の話と丸で同じ」とイギリスの話まで引用するのだが、「余」がその名前を知るはずはない。「余」は「文学者の名なんかシエクスピヤとミルトンと其外に二三人しか知らんのだ」と寧ろ教養の浅さにひらきなおったような態度を見せる一方、「心の中は何となく不愉快」になって帰宅を選択するのである。

すると、今まで述べてきた法学士と文学士の対立はこのようにまとめることが出来る。

法学士（立身出世、新時代の官僚、常識人） ⇔ 文学士（高等遊民、貧乏士族、知識人）

主にこの二項対立は法学士「余」の内面によって明らかになるのであるが、ここで注目したいのは、この二項対立の発端ともなった第三項の存在である。その第三項とは、これから「余」が帰るところで「余」を待っているはずの「迷信婆」である。

「人間は慥かに相違ないが迷信には驚いた。何でも引き越すと云う三日前に例の坊主の所へ行つて見て貰つたんだそうだ。すると坊主が今本郷から小石川の方へ向いて動くのははなはだよくない、きっと家内に不幸があると云つたんだがね。——余計な事じゃないか、何も坊主の癖にそんな知った風な妄言を吐かんでもの事だあね」

「しかしそれが商売だからしょうがない」

「商売なら勘弁してやるから、金だけ貰って当り障りのない事を喋舌るがいいや」

「そう怒つても僕の咎じゃないんだから埒はあかんよ」

「その上若い女に崇ると御負けを附加したんだ。さあ婆さん驚くまい事か、僕のうちに若い女があるとすれば近い内貰うはずの宇野の娘に相違ないと自分で見解を下して独りで心配しているのさ」(中略)

「それを心配するから迷信婆々さ、あなたが御移りにならんと御嬢様の御病気がはやく御全快になりませんから是非この月中に方角のいい所へ御転宅遊ばせと云う訳さ。飛んだ預言者に捕まって、大迷惑だ¹⁴」

ここの婆さんは『坊ちゃん』の清の前身ともいわれる人物で、清がそうであるように、「余」の面倒を見ながら「余」の成功を願ひ、そしてずっと「余」に前近代の価値を想起させる役目を持っている¹⁵。『坊ちゃん』と違うところと言えば、婆さんが主張する前近代の価値が迷信として扱われることであろう。占いだけではなく、毎朝梅干に白砂糖を懸けて食べるのが疫病よけのまじないだと信じ、犬が遠吠えをすると不吉が起こる¹⁶と心配する「迷信婆」の話を「余」は全面的に否定するのである。常識人の「余」にとって迷信は撲滅しなければならない対象にすぎない。迷信撲滅は明治の時代精神でもあったが¹⁷、「琴のそら音」が発表された1905年は迷信に関する考え方にさらなる変化がみられる。その転換期ともいえる。

近代合理主義に相反するものとして扱われてきた迷信、怪談などの類が井上円了(1858-1919)の活躍もあって科学の一種として認識され始めたのがこの時期である。その社会的な変動を表したのが先に述べた「余」と「津田君」の会話であることは言うまでもなからう。また、1905年は日露戦争の年であり、ちょうど「琴のそら音」が発表された5月は戦勝がある程度見えてきた時期でもある¹⁸。西洋に対する文化的な劣等感が解消される契機となった日露戦争について、漱石自身も精神の勝利だと評したことがあり¹⁹、文学史においては日本の古典を本格的に再評価するようにもなった。もちろん怪談に限って言えば、文化的劣等感解消の土台を作ったものとしては東京帝国大学における漱石の前任でもあるラフカディオ・ハーン(Lafcadio

Hearn, 1850-1904) の『Kwaidan』(1904年) を指摘しなければいけないだろうが、本稿では「琴のそら音」を中心にしてハーンについては言及しないことにする。ただし、明治になって疎外されてきた怪談を取り上げてその味方を自任したハーンのように、「琴のそら音」において「津田君」も「迷信婆」の味方となっていくことは注目に値するだろう。白砂糖を懸けて梅干を食べる習慣に対して日本中どここの宿屋に行っても朝に梅干を出すという点から「成程夫は一理あるよ、凡ての習慣は皆相応の功力があるので維持せらるゝのだから、梅干だって一概に馬鹿には出来ないさ」と評価する「津田君」は、「迷信婆」が婚約者の健康を心配して「余」に忠告するように、インフルエンザだと聞いて低い声で「注意したまへ」と言うのである。これに対して「余」は「なんて君迄婆さんの肩を持つた日にや、僕は愈主人らしからざる心持に成つて仕舞はあ」と反発する。

ここで「余」が「愈主人らしからざる心持」になった理由を最初のところに戻って考えてみると、「余」が何故「津田君」を訪問したかを明らかにする必要があると思われる。「余」は表面上「津田君」と追憶を共有したくて来たようにみえる。

「珍らしいね、久しく来なかつたじゃないか」と津田君が出過ぎた洋燈の穂を細めながら尋ねた。

津田君がこう云つた時、余ははち切れて膝頭の出そうなズボンの上で、相馬焼の茶碗の糸底を三本指でぐるぐる廻しながら考えた。なるほど珍らしいに相違ない、この正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日まで津田君の下宿を訪問した事はない。

「来よう／＼と思ひながら、つい忙がしいものだから——」

「そりあ、忙がしいだらう、何と云つても学校にいたうちとは違ふからね、此頃でも矢張り午後六時迄かい」

「まあ大概その位さ、家へ帰つて飯を食ふとそれなり寐てしまう。勉強所か湯にも碌々這入らない位だ」と余は茶碗を畳の上へ置いて、卒業が恨めしいと云ふ顔をして見せる²⁰。

「余」は「卒業が恨めしいと云ふ顔をして見せる」のであって、実際学校にいた頃に戻りたいと念願しているとは思われない。「余」が「津田君」の下宿を訪問して確かめたいのは、二人が共有する昔の価値と二人の差異を明らかにする今現在の価値、両方である。「余」が確認しようとする今現在の価値とは、自らずっと主張するように、忙しい近代人としての自分にほかならない。だからこそ、「余」はその対蹠点としてわざと「迷信婆」の話を持ち出すのである。

しかし、科は違っても自分と一緒に近代の価値を共有しているはずの「津田君」が「迷信婆」の肩を持つと「余」の近代知識人としての確信は揺らぎ始める。以上の過程を整理してみると以下のようなものになる。

訪問（近代人としてのアイデンティティーの確認） ⇒ 婆さんの話（対蹠としての前近代の表象） ⇒ 幽霊話（前近代を肯定する近代的な知） ⇒ 不安（近代人としてのアイデンティティーの危機）

3. 帰路から得られたもの、死の恐怖

「津田君」が「よく注意したまへ」と言っただけで聞かせてくれた話は「余」が不安を感じ始める契機であった。婚約者がインフルエンザだという「余」の話が津田君の親戚の話（インフルエンザによる死の話）へと繋がって婚約者の死（愛の消滅）という恐ろしい想像へと発展するのである。

インフルエンザは近代という時代の産物である。スペインインフルエンザの恐怖はこれから後の話になるが、当時インフルエンザという用語が西洋から輸入されたものとして近代という時代を象徴するものであったことは言うまでもなからう。

そして、「津田君」の話の中でインフルエンザは戦争へと繋がっていく。インフルエンザが近代化の産物であるとしたら、戦争は、特に日露戦争は日本近代化の総集結であり、またその試演の場であるともいえよう。

このような近代化の表象によって「余」が少しずつ想起するものは結局「死の恐怖」である。「津田君」が一度喚起した死は、「余」を不安にし、この不安は「余」の帰路で絶頂に至る。伝えられた話としての死を今度「余」は坂という生と死の境界に立ちながら目の前で目撃し、遂にはその恐怖に捕らえられるようになる。

「津田君」の下宿を出た「余」は帰路の途中、小石川の極楽水に至る。極楽水は「余」にとってそこ自体が「いやに陰気な所」であるが、空家になった長屋²¹をみて「余」はまた死について考え始める。

貧民に活動はつき物である。働いておらぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水の貧民は打てども蘇み返る景色なきまでに静かである。——実際死んで居るのだらう²²。

「余」の認識において、貧民（労働者）は活動（労働）する者であり、働かない、即ち「余」のように忙しくない貧民は死んでいるのと同様である。もちろん貧民だ

って働かない権利、労働を拒否する権利はあるのだが、近代人、そして常識人の「余」にとってそれは死に等しいものである。すると、ここで「余」と長屋の貧民たちの間にはその労働の有無によって生と死の壁が建てられたともいえるが、間もなくしてその壁は容易く崩れてしまう。

乳飲子の棺桶を担っていく黒衣着物をきた男二人は高くも低くもない声で、ただし「夜が更けて居るので存外反響が烈しい」声で、「昨日生まれて今日死ぬ奴もあるし」と言う²³。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と余は胸の中で繰り返して見た。昨日生まれて今日死ぬ者さへあるなら、昨日病気に罹つて今日死ぬ者は固よりあるべき筈である。二十六年も娑婆の気を吸つたものは病気に罹らんでも充分死ぬ資格を具えて居る。かうやつて極楽水を四月三日の夜の十一時に上りつゝあるのは、ことによると死にに上つてるのかも知れない。——何だか上りたくない。しばらく坂の途中で立つて見る。然し立つているのは、殊によると死にゝ立つて居るのかも知れない。——また歩行き出す。死ぬと云う事が是程人の心を動かすとは今までつい気がつかなんだ。気がついて見ると立つても歩行いても心配になる、此様子では家へ帰つて蒲団の中へ這入つても矢張り心配になるかも知れぬ。何故今迄は平気で暮して居たのであろう。考へて見ると学校に居た時分は試験とベースボールで死ぬと云ふ事を考へる暇がなかつた。卒業してからはペンとインキとそれから月給の足らないのと婆さんの苦情で矢張り死ぬと云ふ事を考へる暇がなかつた²⁴。

昨日生まれて今日死ぬこともありうるという死の恐怖を通して「余」が悟つたのは、死がいつもそばにあるという事実である。しかし、忙しい近代人としての「余」はこのようなことをつきつめて考える暇がなかつた。「余」にとって死は、近いところに存在しながらも忘れてきたものであり、「余」は坂に立ちながら、その瞬間ようやく死を目睹するのである。

生と死の区分が不分明になる境界（異界）としての坂は以後にも続いて登場する。切支丹坂へ至っては、前にみて笑つた「日本一急な坂、命の欲しい者は用心ぢや／＼」という張札をみて笑えなくなる。坂の上に立っている「余」にとってその文句は「聖書にでもある格言」のように思われるのである。

結局この作品において、生と死の境界として登場するのは日露戦争の戦地としての満州と坂、二つであるといえる。満州は「津田君」の話によって、幽霊が現れる空間になるのだが、戦地という側面から考えて満州が生と死が共存したところであ

ったことも言うまでもなからう。

「余」にとって婚約者はいつも一緒にいるはずの愛しい存在であるはずだが、インフルエンザを通して少しずつ病者のイメージが強くなり、遂には死へと結びつけられる。死がいつもそこにいて今まで忘れていたものである以上、婚約者もまたもう親密な（ずっと一緒にいる）存在ではなくなる。「津田君」の幽霊話によって「余」の婚約者は一度日露戦争という死の関門へ行ってきた「不気味なもの」になってしまったともいえよう。

「琴のそら音」が発表された1905年5月の2ヶ月前に『東京日日新聞』に井上円了の妖怪研究会関連の記事が載せられる。井上円了といえ、仏教の近代化を提唱し、その一環として妖怪・怪異現象などを合理的に説明しようとした明治の妖怪博士である。円了がその手段として取り入れたものが心理学であり、哲学館であった。心理学の研究として幽霊の本を読んでいる「津田君」はこの円了をモデルにしたともいえるだろう。以下に引用する記事は当時の怪異現象関係の研究が日露戦争と出会う場面である。

妖怪研究会

妖怪に就て多年研究中なる彼の井上円了氏は今回の戦争中に定めて種々の奇瑞異変其他不可思議の出来事あるべきを察し此のたび汎く其材料を蒐集する由其重なる項目は第一感通（例へば戦地にて死傷せし時に其血縁あるものに前知せ又は夢知らせ等ありたる場合及び郷里又は家族中に異変ありたる時に戦地にて感知したる場合の如きを云ふ）第二前兆（戦死又は負傷の前に本人の身上又は見聞上に兆候ありし場合を云ふ）第三奇運（世に所謂天助神護に依りて万死に一生を得たるの類例へば携帯せる御守が弾丸を隔つて負傷を免れたるが如きを云ふ）第四奇瑞又は異変（戦時中に普通の道理を以て解し難き奇怪を現象に接近したるを云ふ）等にて右実験の人人は其詳細を認めて小石川区原町哲学館内妖怪研究会へ宛て、寄送せらるべく其事項を書冊に記載したる場合には此れを其寄贈者に進呈すべしとなり²⁵

東京日日新聞 1905年3月29日

新聞というメディアが怪異現象と日露戦争を結合させた記事を本格的に量産するのは翌年の1906年からであるが²⁶、以上の記事が1905年3月に載せられたことは、すでに社会全般的に日露戦争と関連する怪談が盛んに流布された事実を傍証するものではなからうか²⁷。漱石が取り入れた「津田君」の幽霊話もおそらく当時人口に膾炙された怪談の中の一つであるという可能性を否定することはできない。

しかし、一方では「琴のそら音」で言及された怪談の構造が日本文学の古典と類似しているところを指摘しなければならない。例えば、日本怪談最高の傑作といわれる²⁸上田秋成の『雨月物語』の「菊花の約」と「浅茅が宿」をあげることができる。信義を守るために自殺し、自ら幽霊になって逢いに行くという「菊花の約」と、戦地に行った夫を待ち続け、死んだ後にも幽霊となって夫の帰りを迎えるという「浅茅が宿」のテーマがこの作品の幽霊話にも見えてくるのである。「琴のそら音」の軍人の妻は若し自分が病気で死んだとしても「必ず魂魄丈は御傍へ行つて、もう一編御目に懸ります」と夫の出征の前に誓い、その誓を守るかのように幽霊となって満州へ行くのである。実際、夏目漱石蔵書目録（東北大学漱石文庫データベース）によると、漱石が1893年版の『雨月物語』に夏目金之助と署名をして所々書き入れながら読んだことがわかる²⁹。

また三遊亭円朝の『牡丹灯籠』や『真景累ヶ淵』との関連も見逃してはいけないだろう。結局のところ、「余」が心配し続けるのは婚約者の死であるが、この婚約者の存在を考える時に彼女の名前が「露子」であることは重要だと思われる。露という単語から「昨日生まれて今日死ぬ」命の虚しさを連想することも可能だが、水川隆夫によってすでに指摘があるように³⁰、漱石が円朝の怪談落語を楽しんだとすれば、ここで円朝の『牡丹灯籠』との連関性も考えてみる必要があるだろう。周知の通り、『牡丹灯籠』のヒロインの名前は「お露」である。それだけではなく、死んだ女の霊魂が生きる男に逢いに来るところも「琴のそら音」における津田君の話と共通するところがある。この作品において「露子」という名前が初めて明らかになるのは、「余」が帰路において最後の坂に至ったところである。その前までに、彼女は未来の細君と呼ばれるだけであって「露子」という名前はずっと隠されてきた。茗荷谷の坂を上がろうとする「余」は、その坂の中途に当たる位置で「赤い鮮かな火」を見る。

是は提灯の火に相違ないと漸く判断した時それが不意と消えて仕舞ふ。

此火を見た時、余ははつと露子の事を思い出した。露子は余が未来の細君の名である。未来の細君と此火とどんな関係があるかは心理学者の津田君にも説明は出来んかも知れぬ。然し心理学者の説明し得るものでなくては思ひ出してならぬとも限るまい。この赤い、鮮かな、尾の消える縄に似た火は余を慥かに余が未来の細君を咄嗟の際に思ひ出さしめたのである。——同時に火の消えた瞬間が露子の死を未練もなく拈出した。額を撫でると膏汗と雨でずる／＼する。余は夢中である³¹。

提灯の火というところから突然「露子」の名前が出された時に『牡丹灯籠』を連想することは無理ではないだろう。「露子」を思い出して困惑する「余」は「津田君」も説明できないだろうと推測しているが、それは「余」が自ら語っているように、心理学者の説明できないもの、言い換えれば近代科学の知によっても説明できないものも現象として有り得るのだという体験が自然に『牡丹灯籠』という前近代のものとは結びついているからではなかろうか。要するに、近代科学の知によっても少しずつ喚起されてきた死は、この瞬間においては「余」が一番軽蔑していた前近代のものへと置換されてしまうのである。

4. おわりに

そして、最後に科学や戦争によって危機に陥る「余」の愛という側面が、以後「趣味の遺伝」へと繋がっていくことも指摘したい。夏目漱石にとって、国家の戦争は個人の愛を危うくするものであり、怪談はその恐怖をいかにも適切に表してくれる材料であった。「琴のそら音」においては戦争が喚起する死の恐怖が「余」の愛を危うくすることにとどまっているが、徘徊する幽霊のように、その恐怖がいつまた「余」を訪れるかもしれない。婚約者が自分をもっと愛するようになったというハッピーエンディングの「琴のそら音」だが、『漾虚集』に収められたもう一つの短編、「趣味の遺伝」においての浩さんの愛は戦争によって完全に破壊されてしまう。その時また漱石が幻想的な要素を取り入れたことは注目に値するだろう。

「琴のそら音」において死の恐怖が個人の愛を危うくすることにとどまっているというのは、この作品の結末が漱石の作品の中では珍しくハッピーエンディングで終わっているからである。「気のせいか其後露子は以前よりも一層余を愛する様な素振に見えた」というのは、「余」が「露子」を以前よりもっと愛するようになったとも言い換えることができる。死の恐怖によってより強化された「余」の愛はどれほど続くのであろうか。

日露戦争という大規模の死を経験した明治日本は戦後以下のような反応を示している。

日露戦争に於ける我が損失

東京医士報国会解散式に於ける、小池軍医統監の演説に依れば、日露戦役に於ける我損失は戦死傷等二十一万八千四百二十九人、病者二十二万二千三百三十六人にして、両者稍其の数を同うせるは、古来の戦史上、其の例を見ざる処の良成績なり、是れ全く医学的進歩の結果なること勿論なれども、尚其の近因に就て

は専ら研究中なりと云へり³²。

東京朝日新聞1905年11月25日

悲惨であったはずの個々人の死が数値として還元された時、死は科学によって裁断され、22万という数字がお祝いの基準となってしまう。日露戦争後これから日本は発展するであろうという三四郎に対して漱石がわざと広田先生に「滅びるね」と言わせた理由もここにあるのではなかろうか。「津田君」が「余」に言った「注意したまへ」という低い声が耳に付いて離れない。

注

- 1 安天「「他者」概念の誕生：江藤淳の『夏目漱石』について」によると、江藤淳の低音部概念は以下のようなものである。
「南画と漢詩、英詩といった芸術趣向は、「生」そのものに対して殆ど生理的な嫌悪の感情」を持っていた漱石にとって、苦痛で在り続ける日常生活の領域から東の間であれ逃れ癒しを得るための、すなわち現実逃避のための世界であったとし、この現実逃避願望が幼い頃から一貫していた漱石の主調低音に据える。（中略）『漆虚集』から始まり『四編』にいたるほとんどの短編小説には、漱石の現実逃避願望が色濃くあらわれているという。厭世的な審美主義傾向の短編小説を執筆する傍ら、生活者としては長編小説に「日本の現実」を描いていたというのが、江藤が提示する漱石象である。」
安天「「他者」概念の誕生：江藤淳の『夏目漱石』について」『言語情報科学』10号、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2012年、p.146
- 2 松本良太「隠蔽された愛の強要観念：夏目漱石『琴のそら音』論」『金沢大学国語国文37』金沢大学国語国文学会、2012年3月。
- 3 神田祥子「「科学」という信仰—夏目漱石「琴のそら音」を視座として—」『東京大学国文学論集5』東京大学文学部国文学研究室、2010年3月。
- 4 荻原佳子「幽霊という狂気：漱石「琴のそら音」」『九州女子大学紀要39巻3号』九州女子大学文学部人間文化学科、2003年2月。
- 5 福井慎二「漱石『琴のそら音』論—インフルエンザの近代文学史」『河南論集6』大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究室、2001年3月。
- 6 宮蘭美佳「夏目漱石「琴のそら音」考：「余」の見た「幽霊」のもたらしたもの」『人文論究46巻3号』関西学院大学文学部、1996年12月。
- 7 没落士族階級出身。彼女は、近い将来に予定されている「余」と婚約者「露子」との新生活準備の役割も担っている。

- 8 近代と旧習、明晰な知と迷信とのうち、後者は「余」の「婆さん」の姿を通して、女性の特質としてジェンダー化されるという側面を、部分的には有している。「婆さん」がジェンダーの側面ばかりではなく、武士階級出身者として旧来の身分秩序の下であれば当然享受できていたはずの特権を剥奪され、低賃金労働を余儀なくされているという意味で、改変されつつあった階級制度におけるマイノリティでもあり、壮年者を特権視する年齢差別 (agism) におけるマイノリティであることも注目されてよいだろう。
- 9 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、pp.99-100。
- 10 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、pp.87-88。
- 11 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、pp.93-94。
- 12 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、pp.99-100。
- 13 自分より優秀な存在に対するルサンチマンが「余」に俗世的出世を志向させた可能性がある。
- 14 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、p.92。
- 15 坊ちゃんと清が想像していた未来、つまり坊ちゃんが官僚になって立派な家を買って一緒に暮らすことを「余」と「迷信婆」はすでに手に入れたともいえよう。
- 16 実際犬の遠吠えに関する俗信は日本全国に広がっている。
 犬が遠吠えすると泥坊がはいる。(富山県) 犬が夜遠吠えするときは死霊を見たときである。立止まって悲しそうに泣く方向にある家は注意すべきである。(沖縄県) 家の後方で犬が吠えたら病人が出る。(沖縄県) 犬の遠吠えは不吉な知らせ。(福岡県) 犬が遠吠えをすると、人が死ぬ。(兵庫県)
 データベースれきはく「俗信データベース (動植物編)」。
<http://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>
- 17 「幽霊を表向き否定せざるを得なかったのは、文明開化のためであるが、これは、日本人の心を少なからず荒廃させた。若松県官は殺生禁断の淵に網を入れ、奈良県会は春日の神鹿を洋銃的とし、京都府は宇蘭盆会・地藏盆を謬説妄誕として禁じ、敦賀県では無用を以て有用を助くべく、石仏を敷台・靴脱ぎに転じ(石田一良「明治開化期と市民文化の成立」、『開国百年記念 明治文化史論集』)、東京府は明治七年、神仏分離に反したとして、お岩稲荷の神体を没収(「明治世相篇年辞典」)
 延広真治「三遊亭月朝『真景累ヶ淵』」『国文学 解釈と教材の研究』37巻9号、學燈社、1992年8月、p.110。
- 18 3月10日奉天占領(陸軍記念日)、4月8日閣議、韓国保護権確立を決定する、4月22日日露戦争の戦没者28,999柱を靖国神社に合祀する、5月1日平民社でメーデー茶話会、5月27日日本海海戦に大勝(海軍記念日)、5月28日日本海海戦にロシア艦隊全滅。
- 19 日本の軍事的成功が日本は西洋に劣ることのない国であるという意識を育てたという事

情について、漱石は以下のように述べている。「力の上の戦争に勝つたと云ふばかりではなく、日本国民の精神上にも大なる影響が生じ得るであらう（中略）サ、かうなつて来ると文学の方面にも無論この反響は来るのである、今まで西洋には及ばない、何でも西洋を真似なければならぬと、一も二もなく西洋を崇拜し、西洋に心酔して居たものが、一朝翻然として自身自覚の途が啓けて来ると、その考も違つて来る、日本はドコまでも日本である、日本には日本の歴史がある。日本人には日本人の特性がある、あながちに西洋を模倣するといふのはいけなぬ、西洋ばかりが模範ではない、吾々も模範となり得る、彼に勝てぬといふことはない、斯う考へが付て来る。」

夏目漱石「戦後文界の趨勢」『漱石全集 第二五巻』岩波書店、1994年、p.108。

なお、この論考が『新小説』に発表されたのは、「琴のそら音」発表3ヶ月後の1905年8月である。

- 20 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、p.87。
- 21 この「空き家」は日露戦争による景気不況を表しているのだろうか。支配階級の覇権的な欲望によって始まった日露戦争が当時の平民たちに経済的な苦痛を与えたことについての問題意識を間接的に表現したものとして捉えても無理ではないだろう。
- 22 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、p.105。
- 23 「津田君」の場合、「インフルエンザ」は高い声で、「よく注意したまへ」は低い声であった。
- 24 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、pp.106-107。
- 25 湯本豪一『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009年、p.482。
- 26 1905年の時点でも、戦死者の写真から血が出る（3月19日『神戸新聞』）とか、日本海海戦を予言した老人の話（6月2日『新愛知新聞』）が見られるが、その露出頻度において1906年のものとは比較にならない。そして、1906年からは日露戦争を表象するような船幽霊の話が本格的に登場し始める。
- 27 1905年の3月という時点で新聞の紙面に怪談が話題にされていることは示唆的である。既に数多くの研究の蓄積があるが、日清戦争の戦争報道経験を既に積んだ新聞メディアは、日露戦争の戦争報道における速報性の重要性に自覚的であった。それ故、以上に引用した記事を、怪談の専門家たちの研究会で取沙汰された内容を単にまとめたものと評価するよりも、当時の戦争中という大量死の世相との関係において、この記事は評価されるべきであろう。機関銃などの新文明によって大規模に訪れた死をメディアとしての新聞が扱うという事実は死が物語化される過程、即ち死が持つ直接的な暴力性を隠蔽する過程であるともいえよう。
- 28 三島由紀夫「雨月物語について」『三島由紀夫全集決定版27』新潮社、2003年、p.211。
- 29 http://dbr.library.tohoku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi

- 30 水川隆夫『漱石と落語—江戸庶民芸能の影響—』彩流社、1986年。
- 31 夏目漱石『漱石全集 第二巻』岩波書店、1994年、pp.108-109。
- 32 荒木昌保『新聞が語る明治史（第二分冊・明治二十六年～明治四十五年）』原書房、1976年、p.361。

参考文献

- 水川隆夫『漱石と落語—江戸庶民芸能の影響—』彩流社、1986年
- 塚本利明『漱石と英文学—『漾虚集』の比較文学的研究—』彩流社、1999年
- 村岡勇『漱石資料—文学論ノート』岩波書店、1976年
- 池田美紀子『夏目漱石 眼は識る東西の字』国書刊行会、2013年
- 藤井淑禎『不如帰の時代—水底の漱石と青年たち』名古屋大学出版会、1990年
- 小宮豊隆『漱石の芸術』岩波書店、1942年
- 荻原桂子「幽霊という狂気—漱石「琴のそら音」」『九州女子大学紀要.人文・社会科学編』39巻3号、2003年2月
- 神田祥子「「科学」という信仰—夏目漱石「琴のそら音」を視座として—」『東京大学国文学論集』5号、2010年3月
- 松本良太「隠蔽された愛の強要観念：夏目漱石『琴のそら音』論」『金沢大学国語国文』37、金沢大学国語国文学会、2012年3月
- 福井慎二「漱石『琴のそら音』論—インフルエンザの近代文学史」『河南論集6』大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究室、2001年3月
- 宮蘭美佳「夏目漱石「琴のそら音」考：「余」の見た「幽霊」のもたらしたもの」『人文論究』46巻3号、関西学院大学文学部、1996年12月
- 権田和士「〈聖なるもの〉の表象をめぐる—夏目漱石「琴のそら音」私解」『日本文学』54巻6号、2005年6月
- 梶島知明「夏目漱石『琴のそら音』の意義—自己像描写とプロットの【相互関係】、及び『文学論』『文学評論』に見るプロット観との比較」『中央大学国文』47号、2004年3月
- Jamet Olivier「夏目漱石の『琴のそら音』における幻想、幽霊、死の主題」『京都産業大学論集 外国語と外国文学系列』27号、2000年3月
- 網倉勲「「恐怖」のレトリック—漱石「琴のそら音」と円朝「牡丹燈籠」」『緑岡詞林』33号、2009年3月